

エジプトでのアラビア語絵本のエンターテインメント性と大衆芸能

富澤規子
アラビア語翻訳者
エジプト文化省大学校アカデミー・オブ・アーツ大学院在学、民俗学専攻

中近東絵本の世界シリーズについてお話を頂いた時、他の言語の執筆者の方から「教育者の読ませたい絵本と子どもの読みたい絵本との差が気になる」というお話をうかがいました。

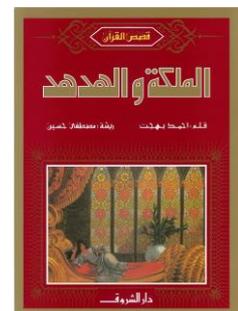
私は 2005 年からエジプトに滞在し、語学学校を経て 2009 年から文化省大学校で民俗学を専攻しています。民俗学は口承文化や大衆文化、つまり口語の世界を扱います。2012 年に私がエジプトで取得した初めての学位、民俗学準修士号を得て、大学校から日本へ向けての文化紹介などの活動の許可を得た時、どこから説明したらよいかわからない未知のジャンルをどう扱えばいいのかと途方にくれたものでした。

文化省大学校の教授だけでなく、指導教官であった国立ヘルワーン大学応用美術学部の教授に、絵本ならば伝承話やアラブの子どもの生活をイラストレーションの助けもかりて、わかりやすく伝えられるのではないかとアドバイスを受けました。そして、当時アルバイトで秘書をしていた国立カイロ大学文学部日本語・日本文学学科や、同文学部アラビア語・アラブ文学学科の教授方から、まずは紹介しなければならない作家をピックアップして頂いたのが、私のアラビア語絵本紹介活動の始まりです。

この時、文学部の教授たちに、紹介すべき筆頭として挙げられた作家がアフマド・バハガット(1932-2011)です。コーランなどの伝統教養から題材を取った正則アラビア語の児童書だけでなく、アハラム新聞のコラムニストとして名高く、名文の数々を残しています。アフマド・バハガットの文章は筆致のお手本として、現在 60-70 代以上の教授職や執筆業などの教養人は、日本で言う「天声人語」のように学生時代に書き写したものと聞かされており、この世代にとって美しい正則アラビア語のスタンダードになっています。

私がエジプト教育省認可語学学校で、副読本として配布された教材もアフマド・バハガットの絵本でした。一例を上げると、コーラン物語シリーズの『女王とヤツガシラ』(図 1) (挿絵 モスタファア・ホセイン、ダール・エルシュルーク社 2008 年、エジプト) はコーランの蟻章をそのまま正則アラビア語で物語に仕立て直した絵本です。

まさに、アフマド・バハガットは「教育者が読ませたいと思う絵本」の代表格と言えるのかもしれません。



(図 1)



このようにしてピックアップした絵本に、日本の図書館司書の方々からのアドバイスで『うさこちゃんがっこうに行く』(ダール・エルシュルーク社、2006 年、エジプト)、『はらぺこあおむし』(アルバルサム社、2005 年、エジプト) などのように世界的に著名なタイトルのアラビア語翻訳本も加えて、日本でおはなし会活動をしています。

さて、図書館のおはなし会にご来場者の方には、正則アラビア語は生活言語である各地の口語と大きく乖離しているので、学習経験がなければ理解は難しい旨をご説明しています。

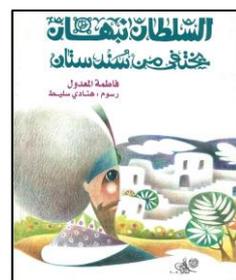
そこでもっともなご質問ですが「それでは、これらの絵本はアラブ人の子どもたちが読めるのか」と問われると、返答に詰まってしまいます。

上記の『女王とヤツガシラ』が語学学校で配布されたのは、私が中学校程度のレベルにいた頃でした。基礎文法を学び修辞法は未履修の小学校レベルのアラビア語力では、おそらく十数ページの『女王とヤツガシラ』でも難解であろうと思います。

このような事情から、「子どもの読みたい絵本」について、アラビア語に限った話で言うと、アラブ人の子ども達が自主的にアラビア語の絵本を手取るのはまず難しいと思います。アラビア文字は生活の中に溢れていますから、子どもたちは文字を追うことはできるものの、基本単語が正則アラビア語と口語で大きく離れていた場合、意味がとれず、一つのつまずきになります。

また、多くの言語で同様かもしれませんが、アラビア語の世界では印刷物や活字媒体は大衆、殊に子どもたちの娯楽の中心にはありませんでした。識字率が低いだけでなく、書籍は総じて高価で誰にでも手が届くものではなかったのです。一昔前のアラビア語絵本といえば、アフマド・バハガットの絵本のように預言者や聖人など伝承や歴史上の人物を取り上げた古典物語からの翻案が多く、初等中等教育での副読本的な立ち位置であり、エンターテインメント性はそもそも顧みられるものではありませんでした。物語を楽しむ媒体と言えばテレビかラジオ、更に時代を遡れば弾き語りや小演劇などの大道芸が主流でした。

エジプトにおいては 2011 年革命以前の長期政権大統領であったムバーラクの夫人、スーザン・ムバーラクによる「すべての人に読書を」運動の一環により、安価なペーパーバック絵本が急激に普及し、作家性、エンターテインメント性の高い絵本が増えていきました。この絵本普及を作家側で主導した一人にファーティマ・エルマアドウルがいます。1970 年にエジプト文化省大学校アカデミー・オブ・アーツ高等演劇学院を卒業し、彼女は児童演劇や児童番組制作から児童文学作家に転身した後、非常に多くの絵本作品を出版しただけでなく、アラブ人としては最初期の国際児童図書評議会 IBBY 会員としてアラビア語絵本の国際的なアピールに強く貢献しています。彼女の代表作であり「すべての人に読書を」運動の中で出版された『ナバハーン王がスドゥスターン王国から消える』(挿絵 ヘネーディ・サリート、エジプト書籍公社、2009 年、エジプト)(図 2)も、社会風刺がきいたドラマとしてはおもしろいのですが、正則語という点で子どもには難解なのです。



(図 2)

このように「子どもが読みたいと思うエンターテインメント」としてのアラビア語絵本の歴史はまだまだ浅いものの、ファーティマ・エルマアドウルのように他分野から流入したベテランに支えられ、若い才能が次々と参入し、この十数年で一気に開花したように見えます。

その為、子ども文化としてアラビア語絵本をとらえた時、絵本ないしは活字文化そのものを語るだけでは理解を深めることは少々不足なため、この回では最近世界的に注目された大衆芸能の話題もふくめつつ、2冊の絵本を中心にご紹介したいと思います。

この世界的に注目された大衆芸能を「アルゴーズ」と言います。

庶民階級で伝承された物語を楽しむ大道芸には、弾き語りや影絵芝居など様々な形態があり、アルゴーズはエジプトの人形劇です。また複数形で「アラゴーズ」と言う時は操り人形そのものもさします。「アルゴーズ」は 2018 年 11 月にユネスコ無形文化遺産として緊急保護リストに登録されました。当然のことながら、この小演劇で使われる言語は生活言語であるエジプト口語です。

この伝承芸能は一般にアラビア語圏で「ヌクタ」と呼ばれる笑話や小噺との相性が良く、子ども向けを装いつつも大人も楽しむ滑稽な即興芝居として、時に支配階層をからかい社会批判もする筋書きが好まれました。またエジプト文化省大学校アカデミー・オブ・アーツの教授たちによると、「アルゴーズ」では艶笑話的な筋書きも好まれたものの、そもそも台本に書かれない即興部分なので残念ながら資料として残っていないとのことでした。

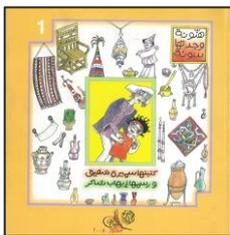
いつの時代も庶民階級の子もたちは総じて早熟で、大人に混じって楽しむ多少卑俗でも刺激的な娯楽に飛びつきますから、冒頭の疑問点「読ませたいものと読みたいものの差」はこの時点で歴然なのです。

このように庶民の娯楽として長年愛された「アルゴーズ」もテレビ放送の普及とともに、その座を取って代われ、オマル・シャリーフ主演で1989年エジプト公開の映画「アラールゴーズ (The Puppeteers)」では、時代遅れで過去の芸能と言う扱いで語られました。



(図3)

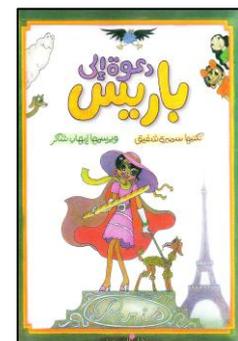
今回ご紹介する一冊目は、この映画から更に10年後にダール・エルシュルーク社から発行された『アラールゴーズ (人形たち) の物語』(ダール・エルシュルーク社、2000年、エジプト)です。(図3)



(図4)

『アラールゴーズの物語』はアラビア語絵本としては、ポローニヤ国際児童図書展に出展された最初期作品のうちの一冊です。物語は女性作家のサミーラ・シャフィーク、挿絵は男性画家のイーハープ・シャーキルの手によるものです。

このコンビは2000年代に精力的に活動し、祖母が孫娘に失われつつあるエジプト伝承文化を語る『フヌーナちゃんとスーナお婆ちゃん』(エジプト書籍公社、2008年、エジプト)(図4)と言った教育的な絵本から、バンデシネを思わせるフルカラーマンガで表現した『パリへご招待』(ダール・エルシュルーク社、2003年、エジプト)(図5)まで、多彩な作品を世に送り出しました。その多くはポローニヤ国際児童図書展に出展され、アラビア語絵本の存在感を世界にアピールするのに大きく貢献しています。



(図5)

『アラールゴーズの物語』では職人によって作り出される人形たちと預言者ムハンマドの生誕祭で賑わう街の様子が描かれています。イスラーム教徒の大半を占めるスンナ派において、大祭である「犠牲祭」と小祭である「断食明け祭」にならぶ「預言者生誕祭」は第三の祭礼とみなされ、スンナ派各国の国民の祝日に制定され盛大に祝われます。アラールゴーズ人形たちは人形遣いに連れられ、祭りで賑わう市へ行きます。市の一角で小さな舞台を広げると、子どもたちがワァワアと囃し立ててアラールゴーズ達に集まってきます。アラールゴーズのお芝居は子どもたちに大人気。

そこで美しい「アリース・マウリド」に出会います。アラビア語で「アリース」も人形と言う意味です。マウリド(預言者生誕祭)のアリース(人形)と言えば、エジプトではこの時期に贈り合う砂糖の型抜き人形をさします。預言者ムハンマドの生誕祭にはこの砂糖人形が市でたくさん売られていたのです。

木切れと布切れで作られたアラーゴーズ達にくらべて、色紙で飾られ食紅でお化粧までしたアルース・マウリドたちの美しいこと！ アラーゴーズは美しい砂糖人形とお近づきになりたいとおもうのですが、やはり砂糖で型抜きされた騎士人形がそれを阻みます。ついにはアラーゴーズと砂糖の騎士人形と剣を交える大闘争になって……。

ネイティブであるエジプト口語を話す現地の子どもたちにとっては、一昔前の風習を伝える親しみやすい題材のこの絵本、平易なアラビア語で書かれてはいますが、十数行が13ページと文字数が多いのです。

日本の公共図書館で日本人対象にアラビア語絵本の読み聞かせをしていて、それぞれの絵本の対象年齢についてよくご質問をいただきます。日本語絵本では未就学児対象のような文字数の少ない絵本でも、アラビア語の場合は小学生以上とお答えしています。

なぜかといいますと、繰り返しになりますが冒頭でご説明した通り、アラビア語は生活言語としての口語と正式な場でつかわれる書き言葉である正則語の差があまりに大きいので、学習経験がないと正則アラビア語の理解は困難だからです。

ここでご紹介している『アラーゴーズ (人形たち) の物語』も、この執筆のために何歳ぐらいなら読めるのかと、大学の教授方からご近所の方々まで聞いて回ったところ、文字数が多いので小学校高学年が数日かけて読むのがやっとではないかとのこと。

私達日本人の想像する絵本読者の年齢よりも、アラビア語絵本の読者年齢はやや高めです。そしてネイティブの子どもたちは、アラビア語絵本を読むだけの学齢になると、娯楽の選択肢がすでに大きく広がっているので、残念ながら絵本を手取る機会はどうしても少なくなります。

二冊目の紹介は2010年代半ばに発行された『エルレイラ・エルケビーラ (大きな夜)』(作 サラーフ・ジャーヒン、挿絵 ハーリド・スルール、エジプト書籍公社、エジプト)です。革命後の各セクションで責任者交代が頻発した時期に発行されたせいか、奥付に発行年が明記されていないので、本稿では代わりに国際図書番号 (ISBN) を示しておきます。本書のISBNは978-977-448-783-5です。(図6)

「エルレイラ・エルケビーラ」とは預言者ムハンマド生誕祭の夜をさし、このお祭りの夜には不思議がおこると言う伝承があります。人出で溢れる街々では子どもが行方不明になることも少なくなく、こういった伝承話の下敷きとなる出来事が庶民生活のなかで実際に繰り返されていたのでしょう。



(図6)

この絵本は預言者生誕祭にまつわる伝承を元に1961年に制作されたパペットミュージカルの脚本を、そのまま活字化したものです。パペットミュージカル『エルレイラ・エルケビーラ』は子ども向けに全長約40分と短く、印象的なメロディが作中で何度も繰り返されます。(図7)

エジプト国内だけでなくアラビア語圏で繰り返し広く放送されているため、現在中高年以上の殆どのエジプト人と多くのアラブ人が、メロディや歌詞を口ずさめるくらいに共通の思い出となっています。歌詞はすべてエジプト口語ですが、エジプトはアラブ全体に対して人口比で大きな割合を占め(現在はアラブ連盟加盟国総人口の約4分の1がエジプト人)、映画や歌謡曲などの芸能の輸出大国なので、エジプト口語は輸出された歌謡曲やドラマ、映画などの作品とともに、アラブ世界に広く浸透しています。



(図7)

このパペットミュージカルは、民族楽器による郷愁的なメロディや、視覚的にエジプトの風俗を伝える舞台装置によって、アラブ世界の外にも広く受け入れられ、ブカレストの国際人形祭を始めとして、多くの国際的な評価を得ています。オリジナルは白黒フィルムでしたが、1980年代初頭にはカラーフィルム化され、その人気は落ちることなく再放送と再上演が繰り返されています。

2001年にはカイロ・オペラ・バレエ団によって舞台化されたことにより、子どもたち自身が演じ参加できるようになり、現在動画サイトで検索をすると、ショー番組内で『エルレイラ・エルケビーラ』を歌い踊る子どもたちの動画を多数見つけることができます。

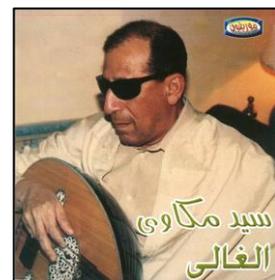
2020年にはアニメーション化の製作発表とともに、アヌシー国際アニメーション映画祭の国際見本市・MIFAにおいて予告編が発表されるなど、時代を経てもまったく古くならない金字塔のようなタイトルなのです。

物語は預言者生誕祭に、屋台や移動遊園地の観覧車、大道芸のライオン使いや踊り子たちと、それを見物しながら練り歩く人々の様子が描かれます。街は羽目をはずした大騒ぎ。そこへ不思議な貴婦人がふっと現れて……。

パペットミュージカルであり、絵本でもある『エルレイラ・エルケビーラ』の作家は、ムハンマド・サラーフ・エルディン・バガット・アフマド・ヘルミー(1930-1986)、通称「サラーフ・ジャーヒン」と呼ばれた口語詩人です。カイロの庶民的な区画ショブラ生まれ、カイロ大学で法律を学んだあと、1955年に週刊誌の諷刺画家としてキャリアをスタートさせています。

1952年革命後の民族主義的もしくは愛国主義的な時流のなかで、それ以前は低俗とされ文学の範疇外に置かれていた口語詩を、芸術とみなされるポジションに押し上げた功労者の一人です。

彼のエジプト口語詩は『エルレイラ・エルケビーラ』だけでなく、多くの人形劇や歌謡曲に提供され、今なお親しまれています。そして『エルレイラ・エルケビーラ』に曲をつけたのは、エジプト音楽史において全盲の弾き語りとしてその名を不動のものにしたサイード・メカウィ(1927-1997)(図8)です。かつてのアラブ世界では視覚障害者の伝統的な職業は、コーラン詠唱者が弾き語りでした。メカウィはコーラン詠唱者としての訓練を受け、高くよく伸びる声質で多くの聴衆を彼の歌声に惹き込んだものでした。



(図8)

さて、ここまでお読みになっていただいて、冒頭の「エンターテインメント性のある物語」とは、元来は口語の弾き語りなどの大衆芸能と述べたことを思い出して頂けるでしょうか。

アラブ世界における子ども向けタイトルの金字塔『エルレイラ・エルケビーラ(大きな夜)』は、実はこの延長線上にあるのです。

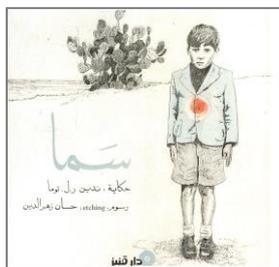
そして、子ども文化としては後発のアラビア語絵本はエンターテインメント性を備えたことと、2011年のアラブの春による民族主義復興の影響を受け、口語文化にゆるやかに合流する可能性をもっているのかもしれない。



(図9)

その顕著な例としては、絵本ではありませんが『出来事の本ーエジプトにおける童話辞典』全四巻(エジプト書籍公社、2012年、エジプト)です。口語のまま採話された子ども向け民話集で、発行責任者は絵本『エルレイラ・エルケビーラ』の発行責任者と同じ、演劇博士のアフマド・マガーヒド博士です。生活のなかの言葉のまま書き取られているので、ネイティブ話者には音読でスムーズに読める内容になっています。(図9)

そして『エルレイラ・エルケビーラ』の絵本化と、レバノン口語の絵本『サマ(空)』(作 ナディーン・トウマ、挿絵 ハッサン・ザフレディーン、ダール・オンブズ社、2015年、レバノン)の発行が続きます。(図10)



(図10)

『サマ』はエジプト口語ほどはアラブ世界に浸透はしていないレバノン口語で執筆されたため、作者でありダール・オンブズ社の代表であるナディーン・トウマ自身も読者を限定すると考えたのか、出版直後からアラブ世界の共通語である正則アラビア語で、そのタイトルに込められた意味やあらすじやテーマについて数多く発信していたものでした。『サマ』はボローニャ・ラガッツィ賞を受賞したために、絵本の話題では珍しく一般のニュースサイトでも数多く取り上げられていました。私も日本アラブ協会機関誌で『サマ』の紹介記事を書く際に、ナディーン・トウマ氏に質問をいくつかお願いしたものです。

文学や活字文化に口語が入ってくる事例は、絵本を抜きにしても、アラビア語話者の私としては注目すべき現象でした。2010年代はSNSの普及で話し言葉のままアラビア文字で読み書きすると言う新しい文化が急速に定着しています。加えて、アラブの春によって「庶民的」「大衆文化」と言うフレーズが殊更好まれた世相で、「アラーゴーズ」の無形文化遺産への申請はこの流れの中にあるように思えます。

そんなことを頭の片隅に置きながら、カイロ市街の書店やブックフェアでアラビア語の絵本を探している時、口語の絵本がもっと出版されないかと期待してしまいます。ここ数年では、地の文が正則アラビア語でありながらセリフ部分だけ口語で記されていたり、全文口語の絵本も少ないながらも発行されています。

例を挙げると、セリフ部分のみエジプト口語表記には、私たちの民話シリーズ『賢い薪売り』(採話 ザイナブ・カマル、挿絵 マルヤム・ラマダーン、マコウク社、2021年、エジプト)(図11)、全文口語表記には伝統的な焼き菓子「カアク」を題材にした『お祭りのカアク』(作と挿絵 ミラーム・ハミースとレワーン・サラマ共作、アウハウル社、2021年、エジプト)(図12)があります。どちらも新興の中小出版社からの本です。



(図11)



(図12)

『サマ』の版元ダール・オンブズ社も作家自身が立ち上げていることから、口語絵本は大手では編集会議を通りにくい試行錯誤の段階なのかもしれません。ですがこの流れが途切れず作家が育てば、遠くない将来にはエジプト書籍公社のような最大手からも出版されないかと期待します。

とりわけ、児童雑誌に掲載されるマンガでは吹き出し部分が口語の作品もすでにありますので、子ども達側には口語ならスムーズに絵本を読める準備ができています。

このような口語文化の台頭により、かつてアラーゴーズに子どもたちが集まってきたように、アラビア語絵本は「子どもが読みたいと思うエンターテイメント」の時代を初めて、迎えようとしているのかもしれません。